

理事長在任時の学会を振り返って

(’88年6月～’92年6月 学会大会18回～21回)

第4代理事長 田中 鎮 雄

1988年からの4か年は、浅田会長時代の幕明け期であった。江橋会長から浅田会長にバトンタッチされただけではない。従来からの日本レクリエーション協会と日本レクリエーション学会との緊密な協調体制から脱出して日本レクリエーション学会を独立させ、いわゆる浅田会長体制を確立していく過程であったとみてよい。表面的には新旧会長の交代にすぎないが、日本レクリエーション学会にとっては、正に激動期突入を意味するものであった。江橋前会長は、日本レクリエーション協会のレジャー・レクリエーション研究所長として引続き活動される形をとったので、同所長について移籍していった会員も少なくなかった様である。日本レクリエーション学会と日本レクリエーション協会との分離独立が、果して賢明な策であったかどうかは、わが国のレクリエーション運動史家、ないしはレジャー・レクリエーション学会史の研究者に評価を託したいと考えている。

日本レクリエーション学会との個人的な係わりについてみれば、理事長就任までの何年間かは、多くの学会員を会させ、学会大会では数多くの研究発表をさせて来た。学会の活性化に貢献大であると認められたのも事実である。やがて理事としての職務を遂行し、理事長職を拜命して学会の発展のため、微力ながら渾身の力を振り絞って努力したことはいうまでもない。浅田会長はもちろんのこと、役員の方々も学会の発展を願って知恵を出し合い、力を尽くして頑張って下さった。「それにも拘らず」と申し上げたい。学会の中心事業である「レクリエーション研究」普通号発行が遅滞し、学術会議登録団体の資格を喪失するなど、信じられないような失態を演じてしまったのである。会員の皆様には申し訳なく、全く弁解の余地がない。

「レクリエーション研究」普通号の遅れについては、常任理事会で再三対策を論議し、然るべき手を打ったのであるが、結果は周知の通りであった。この件に関しては、第22号の「レクリエーション研究」(92年7月)の編集後記で会員に陳謝して次のように述べている。

会員の皆様……、特に投稿いただきました方々には大変ご迷惑をおかけいたしました本号は、本来1990年前期に発刊されているべき号であり、丸2年の遅れとなってしまいました。これは一重に編集委員会の怠惰が招いた結果であり、深く反省し、一刻も早く遅れを取り戻すよう尽力する……所存でありますので、ご寛恕願えれば幸いです、……既に23号と25号とが「レクリエーション研究」の名称で発刊されていることから、本22号および次回24号は旧名称で発刊させていただくことにいたします。

云々……。

学術会議登録団体の資格喪失問題は、学会の存立にかかわる重大な問題であり、一事務局の失態ですまされる問題では勿論ない。学会総会で会長が陳謝し、理事長が事実の経緯を詳細に説明し、固い決意を秘めて深謝したのであった。理事長職を退いてからは学会に参加していない。このため現状は不明であるが、苦い体験を踏まえて、次のように提言するのをお許し願いたい。(一)理事長は事務局と同じ機関に所属していること。(二)東京または関東の支部組織を育て、支部選出理事制度を確立すること。

新しいレジャー時代を迎え、J.L.R.学会の益々の発展を心から願って擱筆したい。